

会員の ひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

思い残さないために

滝川市医師会
滝川市立病院

ながい かずしげ
永井 和重

還暦を過ぎ定年まであと数年となる中、これまでの仕事や生活のスタイルについてそろそろ見直すべき時期にきているのではないかと思うようになった。60代という年齢が心身ともにそれまでとは違うということを実感させ、自然とそのような発想が生まれるようになったのかもしれない。他の職業であれば定年前から年齢により一律に給与の減額、他社への出向、早期退職等の人生の大きな転機が待ち受けている。しかし医師は知力・気力・体力が持続する限り、いつまでも現在の仕事を継続することができる。20代後半で医師となり現在までその時その時に与えられた職場環境で職務を遂行し、今後もしばらくはそのスタイルを維持して行くのだろうが、この間に何かやり過ぎてきたこと、やり残してきたことが多々あったような気がする。日本人男性平均寿命に達するまでまだ20年余りあるが、20年などあつという間だろうし、今後20年間今と変わらない心身の状態を保てるかは甚だ心許ない。ならば今のうちから少しずつ人生の方向転換を始め、やり残してきたことにもう少し時間と労力を傾注しても罰は当たらないだろうと思うようになった。

高校2年の倫理社会の授業で初めて哲学なるものを知り、夏休みにプラトンの『ソクラテスの弁明』、デカルトの『方法序説』、そしてサルトルの『実存主義とは何か』を読むことが課題とされた。それまで書物は文字さえ読めればその内容は自ずと理解できるものと思いついてきたが、その時は文字は読めるものの一体何を言おうとしているのか全く理解できず、このような書物が世の中に存在し、しかもそれが価値の高いものであることに初めて衝撃を受けた。以来これらの書物（いわゆる古今東西の名著と

呼ばれる哲学書）を何とか理解したいと思い続けてきた。これまでいきなりそれらの名著に挑戦しても歯が立たないことを思い知り、それらの書物の解説書を同時に読むことにした。しかしその解説書にしてもそう簡単に理解できるものではなく、そのような様々な情報を仕入れながら、やはり地道に原著を読み進め理解する以外に方法はないと思うに至った。まさに学問に王道なしということだろう。ただし読む順番はありそうである。西洋哲学であればやはりその源流であるギリシャ哲学から始めるのが良いように思う。そしてその筆頭はプラトンの著作である。プラトンはソクラテスの弟子で、ソクラテス自身は1冊の著作も残していないが、プラトンがソクラテスと弟子たちとの哲学問答を対話形式で著した作品がいくつもあり、これらは比較的理解し易いと思う。続いてプラトンの弟子のアリストテレスの著作に移ることになるが、これらは本格的な哲学的論述形式の大著であり未だに攻略できないでいる。

ギリシャ哲学のみに逡巡しているのももったいないので、近世のデカルトや近代のカントなどへと歩みを進めたが、デカルトはまだ理解できる方だがカントは難解で歯が立たない。ただしここで注意を要するのは、当然ながらこれらの書物は全て日本語に翻訳されたものであり、翻訳によりかなり内容がわかり易かったりそうでなかったりすることに気がついた。なので哲学書を理解することが難しいのは単に私の頭が悪いためばかりではなく、翻訳による影響も大であると勝手に自己弁護している。それに加えてそれぞれの哲学者が日常生活では使われないような言葉を使用し、それをさらに馴染みのない日本語に翻訳されるので増々訳がわからなくなる。例えばアリストテレスの有名な「観想的生活」と言われても、事前にこれの意味するところを知らなければ一体どういう生活なのか理解不能である。私の好きなテレビ番組にNHK Eテレの「100分de名著」というのがあり、これまでカントの『純粋理性批判』、ヘーゲルの『精神現象学』そしてハイデガーの『存在と時間』などが取り上げられた。この番組によりそれまで雲の上の存在としか思われなかったこれらの著作の輪郭が、おぼろげながら見えてきたのは非常に有益であった。

高校生以来なぜこれらの難解な哲学書に惹かれ続けているのか？ 難しいパズルを解いた時の喜びに似て、単に難解な書物を理解できた時の喜びを味わいたいためなのか？ 決してそうではないと思う。哲学の根本には常に「ひとはどう生きれば良いのか？」という問いが投げかけられているように思う。その答えを見つけないがために、わざわざ難解な書物と悪戦苦闘を続けているように思う。これからの残りの人生をこれらの書物と格闘しながら過ごすことができれば、それが一番の幸せではないかと思っている。